The Pacific Society

太平洋人物誌

松江春次

シュガー・キング

(1876—1954)

いまも、サイパン島ガラパン公園に屹立する銅像は、現地で「シュガー・キングの像」と呼ばれ、かのサイパン島激戦のさなか、マッカーサーが「この像だけは壊すな」と指令したと伝えられる南洋の開拓者松江春次往年の雄姿である。

元会津藩士の次男、蔵前に学ぶ

松江は、明治九年一月十五日、元会津藩士松江久平、のぶ夫婦の次男として会津若松に生まれた。父久平は会津武士の典型的性格をもつ男で、大酒家の彼は、夕餉の卓で濁酒を酌みながら、戊辰の役を語り（朱雀隊の参謀格であった）西南の役を語り（郷里を抜け出て従軍し、功績を挙げた）それがやがて政治の持論へと進展して行った。この父の血を受けた兄弟である。後に兄豊寿は陸軍少将、退役後に会津若松市長となる。弟春次は兄に劣らぬ酒豪、軍人への夢は果たせなかったが、後年彼が南方の経綸にかけた活躍は多分に政治的色彩をもつに至った。

さて、松江は中学卒業後、二度にわたって陸士の入試に挑戦したが、当時は体調に恵まれず失敗、両親ともども負けず嫌いの彼を悲しませたが、後年彼が宴席でその音痴ぶりを発揮するのは、きまって「日清談判破裂して、品川乗り出す東艦」だったのは、当時の心境の名残りであろう。軍人への志望を絶たれた松江は、翻然技術家への道を選んで上京、東京高等工業学校に入学、当時名校長とうたわれた手島精一の訓育を受け、明治三十二年製品科（後の応用化学科）を卒業した。後に賢夫人といわれた彼の妻ふみは、この手島校長の次女である。

蔵前での学業を終えた松江は、大日本製糖に入社、大阪工場に勤務中、農商務省の海外実業練習生試験に合格、日糖からは海外遊学を命ぜられたのでアメリカに渡り、ルイジアナ大学に入学、明治三十八年同校砂糖科を卒業、マスター・オブ・サイエンスの称号を授与された。その後も引き続きアメリカでの実習と見学、ヨーロッパでの糖業視察を経て、同四十年に帰朝した。

大日本製糖で角砂糖に取り組む

日糖大阪工場に戻った松江は工務長に就任、まず角砂糖の製造に取り組み、明治四十一年その製品化に成功した。現在わが国の角砂糖は、世界に比類のない芸術品といわれるが、この製法に先鞭をつけたのは、三十二歳のこの松江青年であった。当時新婚早々の彼が、大阪に居を構えたとき、新妻に渡した蟇口の中味は三円二十銭。これでは新妻も実家に泣きつかざるを得なかったが、月給七十五円という高給はどこに消えてしまったのか。角砂糖の研究に使ったとも、酒代にかわってしまったとも彼は語っていない。

それから二年後、突如として「日糖事件」が発生、経営主脳は逮捕され、酒匂常明社長は自殺、会社の機能は麻痺してしまった。時に工場長の職にあった松江は、自らの施策と奔走により、大阪工場独自で操業を継続、その危機を乗り越え、ここにはじめて事業家松江の片鱗をのぞかせたのである。しかし、藤山雷太が次期社長に就任し、企業再建の目途が立ったのを機会として、その職を辞し日糖を去った。

台湾での製糖事業を担当

内地における精製糖事業に飽きたらず、台湾での製糖事業への転進をめざして日糖を去った松江は、斗六製糖の設立に参画、明治四十三年同社の創立とともに専務取締役に就任。しかし、その好業績が仇となって株式の買占めにあい、大正四年東洋製糖に合併されたので直ちに辞任、いったんは帰京したが、間もなく新高製糖に招かれて経営に加わり、大阪工場を建設して、同社内地におけるドル箱工場たらしめた。さらに、大正六年常務取締役に就任して台湾事業一切の経営を担当、同社の事業を飛躍的に拡大し、配当率二〇割という業績を挙げたが、同社事業地の環境から将来を危惧する松江は、高島小金治社長に対し、度々南洋糖業への進出を前提とする調査員の派遣を進言したが許されず、決然職を辞して東京に去った。なお、この新高製糖は、その後松江の危惧が適中して、業績は下降の一途をたどり、松江が主宰する南洋興発の業績が最盛期を迎える昭和十年、日糖に合併されて消滅した。

「南興」を創立、トップに

大正九年台湾の事業と袂別した松江は、翌十年二月、自己の信念を実地にたしかめるため、サイパン・テニアンに渡り、第一次大戦後の財界恐慌により倒産したサイパン糖業の先発会社、西村拓殖・南洋殖産の棄民約千名の惨状を目撃するとともに、両島の糖業開発に確信をもつに至った。次いで同年八月、海軍民政部の要請に応えて、群島の窮状を打開するため国策会社東洋拓殖が派遣した調査団に、同社総裁の依頼を受けて参加した。

時の東拓総裁石塚英蔵は、この調査結果に基づく松江の提案を受け入れ、電撃的手回しにより救援出勤の具体化にとりかかった。かくて、同年十一月二十九日、東拓の全面協力のもと、拓殖移民を標榜し、松江を経営トップとする南洋興発株式会社の創立をみるに至った。時に松江は四十五歳。疲れを知らぬ働き盛り。これらの折衝に奔走する一方で、会社創立の一週間後には

NII-Electronic Library Service

The Pacific Society

製糖プラントの発注を済ませ、はやくも東京を発ってサイパン島へ旅立った。

失敗にもめげず南洋糖業を確立

不退転の決意と自信をもって取り組んだサイパン製糖工場の建設ではあったが、製糖プラント発注先ドイツの国情から来る着荷の遅延、害虫の蕃衍、異常旱魃等により初年度操業は散々の失敗に終った。しかも虎の子の製品は、関東大震災により東京の倉庫でその大部分を焼失するという悲運も重なったが、松江の対応は迅速だった。新品種の導入、害虫に対する天敵の輸入、私財をなげうっての資金の調達等はともかく、害虫根絶のため、大量の原料甘蔗の焼却処分を命じた際は、松江も気が狂ったと疑われる決断であった。この状態は第二年度にも尾を引き、松江に対する非難は激しく、内地政財界には南洋群島放棄論さえ再燃するに至ったが、松江の不屈不撓の信念は、やがてこれらの試練を克服し、第三年度以降輝かしい南洋糖業の黎明期を迎えることとなる。

特に昭和五年、一六九五年以降二世紀余にわたり、ほとんど無人のまま放置されていたテニアン島に建設した製糖工場は、後に東洋屈指の大工場となり、その原料供給源として同島は隈なく開拓され、文字どおり南興の島を築き上げた結果、この両島で生産された砂糖・酒精の出港税は激増し、昭和七年度以降南洋庁は、台湾総督府に次いで財政の独立を確立するに至った。

太平洋戦争で施設を失う

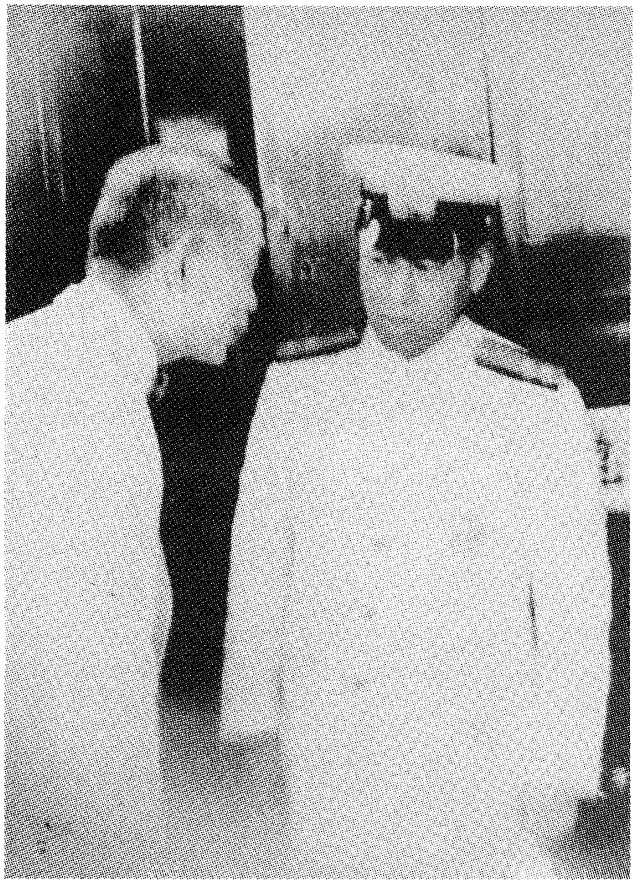
以後、松江の主宰する南洋開発は、マリアナ諸島における製糖事業を中核として、漸次、水産、鉱業、農林、交易、運輸と事業の輪を拡げ、傍系企業二〇社を数える南興コンツェルンを構築し、五万に近い人口を抱擁して内南洋を制覇するに至ったが、不幸にして、その事業地が太平洋戦争の激戦地となり、施設のほとんどが潰滅、また多くの犠牲者を出したうえ、戦後連合国司令部から企業の閉鎖を命ぜられ、再び蘇えることはなかった。

戦後の松江は、不如意の境涯にあっても、米国大使館に日参しては、ミクロネシアの再開発を訴えるなど、開拓者魂の衰えをみせなかったが、時の利あらず、昭和二十九年十一月二十九日南興創立三十三年のその日、雄心波瀾七十八年の生涯を閉じた。法名を顕光院殿春誉南洋興発大居士という。

山本五十六へ平和を訴える

松江の南方経綸にかけた熱意は、昭和六年以降外領への平和的進出にもみられるが、特に昭和九年から日米開戦のまぎわまで、彼が画期的ともいえる蘭領（オランダ領）ニューギニア経営論を掲げて、当時急務とされていた人口問題解決の手段として、また迫り来る戦争の危機を回避するため、憂国の至情を吐露して絶叫を続けたことは『太平洋学会誌』第二四号に詳述されているので、ここでは割愛する。

ここに元南洋興人の保存する一枚のスナップがある。時は昭和十四年八月三十一日、場所は東京駅頭。連合艦隊司令長官に親補されて、旗艦長門の待つ和歌之浦に向う山本五十六。「米英との開戦は何とか避けられるよう、この上ともご尽力願いたい」と当時言語障害のため不自由な言葉で訴える松江。これをじっと聞いている山本五十六の真剣なまなざしはまことに印象的である。いま、往年の彼をかえりみると、定評の孝行息子であり、秀才であり、愛国の士であり、開拓精神の権化という理想像の反面で、口ぐせの「馬鹿野郎」は側近を悩ませ、また勅選議員を志向するといった、結構俗気も強い明治の気骨を示した快男子であった。



山本五十六と松江春次　米内光政海相とともに、日独伊三国同盟に反対しつづけた海軍次官山本五十六中将は、連合艦隊司令長官に親補され、東京駅を発った（木村国太郎氏提供）

〔参考文献〕

南洋興発『第四期営業報告書』大正十二年

松江春次『南洋開拓拾年誌』昭和七年

能仲文夫『南洋と松江春次』昭和十六年

西田鶴子『大南洋を築くまで』昭和十六年

武村次郎編「松江春次年譜」（『南興史』に集録）昭和五十九年

木村国太郎編『南興』（七〇号）昭和六十年

〈武村　次郎〉

NII-Electronic Library Service